

①どこでも主治医と先端技術で応える医療・健康（その1）

ふだんの生活から健康情報がチェックでき、かかりつけ医が遠隔サポート治療と予防医療を行うなど、地域での医療が確保されるとともに、医療費も抑えられ、健康に過ごすことができる。

2040年の生活シーン

<プロフィール>

- 70代後半の女性。夫に先立たれ、但馬地域の小規模集落にある一軒家で一人暮らしをしている。
- 一人になった時は不安だったが、この家にはいろいろな思い出があるし、近所には仲の良い友達もいるので、これからもこの集落に住み続けたいと思っている。

<救急医療>

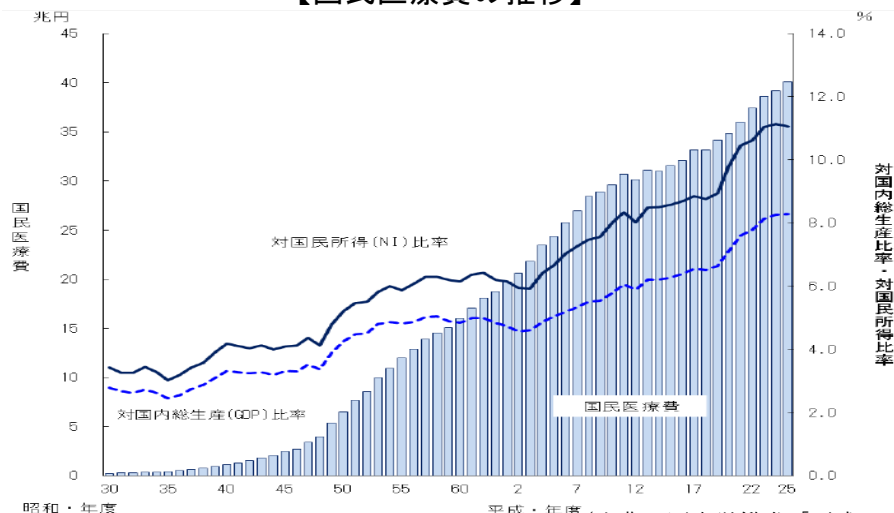
- 1年前、家の階段を踏み外し、頭を打って意識を失ってしまった。長時間動けないでいたところを、一人暮らしになったときに購入した見守りロボットが検知して救急医療の手配が行われ、耕作放棄地を整備して作られた集落内の離着陸場を発着するドクターヘリで街の総合病院に搬送された。
- 手当てが遅れると後遺症が残る恐れがあったと後で聞かされたが、フライトドクターやフライトナースの手早い措置のおかげで、3日ほど入院した程度で大事には至らなかった。

<在宅・遠隔医療>

- 入院時の精密検査で、糖尿病の兆候があることが分かり、かかりつけ医から提案を受けて、高齢者対象の医療データベースに登録することにした。このデータベースは、解析することで、加齢により身体の機能が落ちたり、認知症の症状が出たりするのを、個人ごとに予測できるものだそうだ。
- 私の健康状態を常にモニターし収集したデータを、大勢の健康データと統合することによって、病気の早期発見、早期治療の備えができる。
- 朝、目を覚まし、ドアを開けて歯磨きをすると、ドアノブや歯ブラシから血圧や脈拍のデータが病院に送られていく。今日は毎月1回、地域を巡回している看護師さんの訪問を受ける日だ。1ヶ月分の健康データをもとにした、かかりつけ医の指示を受けて、看護師さんが検査してくれる。
- この前は、血糖値が上がっているとのことで、看護師さんが遠隔医療を手配してくれた。時間になったのでテレビ電話の前に座ると、かかりつけ医の先生が電子聴診器や医療画像を使って診察してくれた。
- 前回の精密検査から1年経ったこともあり、来週は先生の紹介で、総合病院で検査を受けることになった。もう自分では車を運転しないので、自動運転車が運行している地域交通システムに利用登録する。診療時間を登録すれば、他の利用者と合わせて迎えに来てくれるので、とても便利だ。

現状や課題

【国民医療費の推移】



(出典：厚生労働省「平成25年度 国民医療費の概況」)

見えてきた兆し

【ドクターヘリ】

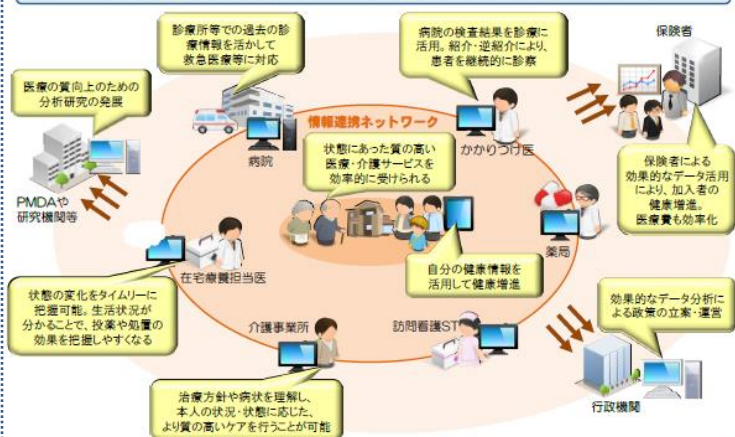


(出典：兵庫県立加古川医療センターHP)

【ICT医療】

医療等分野のICT化が目指す将来像のイメージ

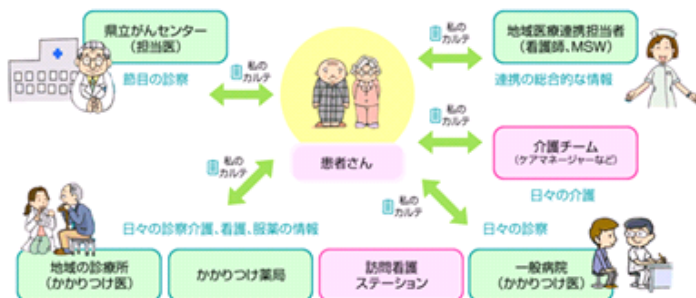
医療・介護サービスの質の向上と持続可能な社会保障制度の確保を目指したICT活用



(出典：厚生労働省「医療・健康分野におけるICT化の今後の方向性」)

【かかりつけ医】

互いに連携・分担して、それぞれの特徴を活かした医療を提供します。



(出典：兵庫県立がんセンターHP)

【遠隔医療】



※テレビ会議システムを用いて、島しょ部等で医師が在宅患者の遠隔診療を行う取組が実施されている。

(出典：内閣府地方創生推進事務局 HP)

【専門家等の意見】

- ヨーロッパと同水準の在宅ケアを行うには、今後15年程度の間には訪問看護師や在宅医療従事者を10倍以上に増やす必要がある。
- 先端医療を受けた後、ロボット技術を使って適切な予後管理をすることができる可能性がある。